

Placental pathology predicts infantile physical development during first 18 months in Japanese population: Hamamatsu birth cohort for mothers and children (HBC Study)

著者	谷口 千津子
発行年	2018-09-21
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003444

論文審査の結果の要旨

申請者が取り組んだ研究の背景：妊娠期間中の子宮内環境は胎盤の機能と構造に影響を及ぼすだけでなく、出生後の児の健康や疾病罹患リスクに影響を及ぼすと言われている。胎盤と新生児の病態に関する研究は多数あるが、日本人の新生児・乳児の身体発育と胎盤との関連性に関する研究はない。そこで、申請者らは出生時の胎盤病理所見が新生児・乳児の身体発育（体重および体格指数（ponderal index: PI））と関連しているという作業仮説を立て、出生後の児の神経・身体発達を追跡し評価している「浜松母と子の出生コホート研究（HBC study）」に参加した新生児・乳児の体重および PI と胎盤病理所見との関連を検討した。

申請者が行った実験：HBC study 参加者のうち、了解が得られた 258 名の単胎妊娠の胎盤病理所見（過熟絨毛、脱落膜血管病変、絨毛内血栓および血管筋層内フィブリン沈着、無血管絨毛、絨毛発達遅延、母体炎症反応、胎児炎症反応、意義不明絨毛炎、脱落膜炎、母体側胎盤循環不全、胎児側胎盤循環不全）と出生後 0、1、4、6、10、14 および 18 か月時点の児の体重および PI との関連を、妊婦の社会的背景、身体因子および妊娠因子などを共変量とした混合モデルを用いて検討した。

申請者の導き出した結論：胎盤の過熟絨毛と母体側胎盤循環不全の病理所見は、出生時から 18 か月間にわたって、児の体重の軽量化因子であることが示されたが、PI との間に関連性は見られなかった。脱落膜炎は児の PI の減少化因子であることが示されたが、体重との間に関連性は見られなかった。その他の病理所見と体重および PI との間に関連性は見られなかった。

審査委員会は、日本人の新生児・乳児の身体発育といくつかの胎盤病理所見に関連性があることを初めて証明したことを高く評価した。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 岩下 寿秀

副査 緒方 勤

副査 山末 英典